



小説 出戻りさん

永代美知代

小枝子は裾模様の小襖を両手に持ったまゝ、ためつすがめつ、じつと見入つて居たが、やがて思ひ切つたと云つた様に、針臺の上の鉄を執つた。

「又解くの？」

向ひ合つてあたつた炬燵の彼方側で、今の今まで雜誌に讀み耽つて居るものとばかり思ひ込んで居た従姉から、斯う突然に聲をかけられて、小枝子は思はずドキリと胸を躍らせた。そしてそれと一緒に斯うした場

美人評論

出戻り

さん

二三

合、何時もの癖の、はつと上氣して耳の根つこまで赤く血をはいたのに、自分でも氣がついた。

「最う大抵でよくつてよ、そんなに幾度も幾度もしかへてばかり居て、あなたよく嫌にならないわね、見ても私むしやくしやして来るわ」

醒みかけて云はれると、小枝子は一がいに解きもし得ないで、鉄を持つたまゝ、今一度小襖を見入つた。

「まだ考へてるの？此人は！」

従姉の貴美子は呆れたやうに、故意と斯う眼を瞞つて見たが

「一寸とお見せなさいな、よく出来てるやうぢやありませんか」

と炬燵のやぐらに片肘かけて覗き込んだ。

「不可ません、見ないで頂戴」

「笑可しな方！」

「だけれども私此處がどうも氣にくはないんですもの」

「結構だわあなた、解かないでお置きなさいよ、その位出来たりや阿母さんに見せたつて大威張りだわ、それに解いたつて段々手際が悪くなつて、けつくサラリ

「としないで不可なかいも知れないわ」
 「てすけども此處がねえ」
 「可いつてば！」

「ねえ解かないになさいつてば」
 急性な貴美子の聲が、如何にも焦つたさうな調子を帯びて来た。

「貴美子さん、後生だから今一度だけ、ね、解いてもよくつて？」

殆んど嗔願的な目を舉げて、小枝子がちとど斯う云ふと、貴美子の額に青筋が浮んで見えた。

「知らないわ私、たゞねえ、見てもしんき臭い程嫌だから、大抵でよろしいつて云つただけぢやありませんか——あなたが縫つて、あなたが解くんだものすべて御勝手だわ」

「……」
 「誤解しないで頂戴、私全く意地悪で止めた譯ぢやなくつてよ」
 云ひ捨て、貴美子は讀みかけの雑誌を片手に、立ち

上つた。サッと障子を開けて、廊下傳ひに母屋の方へ歸つて行く貴美子の足音が、上氣した小枝子の耳に、遠い／＼夢の國のそののやうにも響いた。

「解き度いけれど、解かうか解くまいか」
 小枝子は思ひまどうて、猶もじつと見入つたまゝ考へた。

一體小枝子は縫物にはとりわけ念のいる性で、縫ひ上げたもの、綺麗な代り、ものによつては、十日も十五日も一枚のものをいぢくつた。脊を一つ縫つては縫ひ目を透し、表をかへして打ち眺め／＼するのが、殆んど癖のやうにもなつた。

「まるであなたは耽美派ね、自分で自分の技巧を讚美し、あこがれしてるんだもの」

無遠慮な貴美子は笑ひながら斯うも冷かした。貴美子の仕事は小枝子と反對で、少々ぞんざいな嫌ひはあるが、驚ろく程早かつた。ふだん書物にばかり親しんで、未來の女流作家を以て任じた貴美子は、たまさかしか針を持たない癖に、やり出すと綿入の一枚位譯も無く一日で片附けた。

「どうしてあなたはそんなにも手早なのでせう」

小枝子が不思議がると、貴美子は笑つた。

「あなたのやうに見てばかり居ないせいですよ、その代り早かれ悪かれだわ、私の縫つたものなんか、とてもあなたの仕事と比べものにはならないから仕方が無し」

「なんの仕方がない事があるもんですか、早かれ悪かれだつて、それが解つてる程なら、あなたも些少と小枝さんを見習つて念者におなりが可い、この着物は幾日かへりて縫ひました。やれ何時間縫ひ上げましたつて、一々人前をふれ歩く譯ぢやあるまいし、仕事は可憐な方が可い」

母親は斯う小枝子に賛成するのであつた。何事にも念のいるの、好きな母親は、姪に當る小枝子、出戻つて以來、彼は是を一年の久しい間自家へ引き取つて、何彼と重寶がつては家事を手傳はせた。同じ年頃の貴美子はまだ勉強々々と、その方ばかり凝つて居て、些少とも家事の役には立たないし、一にも小枝さん、二にも小枝さんで、小枝子は小間違ひ兼ち針女と云つ

た格で暮さなければならなかつた。

縮緬の羽織や、召の重ねや、此の一年間に小枝子の手がけた貴美子の着物はかりも、一々覺え切れぬ程澤山な数である。小枝子は幼い頃から父親に死別れて、詫しい不如意な事にけ馴れ切つて居るのだけれど、その津度無心では居られなかつた。多少羨やましい、果敢ない思ひに、淡い嫉妬をさへ感じたが、小枝子が一倍胸を騒がせたのは、今縫ひかけの二枚重ねの紋附である。

本横椰子染の、たゞてさへ針の立ち難い上に、ごり／＼したやうな、まるで鹽瀬かと思はれる程上等の地の合の黒羽二重に、白あがりて、くつきりと華やかな勅題模様を染め出し、處々金糸や色糸で刺繍をさへ施した、その縫ひ難さと云つたら無い。たて襟から裾のつけかたから、叮嚀に／＼、やつとの思ひで模様だけ合せたと思へば、小枝が變な格好になつて来て、幾度しかへても縫ひかへても、思ふやうな形になり兼ねる。

小枝子はともすれば太息を吐いて、人眼の無い折々は危く溢れ落ちる涙に布を汚しかゝつて、そつとヤン

ケチで顔を覆うた——性れつき針仕事が好きな小枝子は、幾ら縫ひ難いからと云つて、側目で貴美子が見るやうに、さして縫ひ返しが苦にもならないのみか、けつく早い事好きの貴美子に氣を兼ねながらも、少しも不満な個所々々をなほざりにして、置かれぬ性分から、そつと内證で出来るだけの苦勞をして見たい積りで居る位である。だが又してもにじみ出る涙は、黒地を見るに堪えぬ程眼元を曇らせた——

「——同じ黒でも、私のあれは譯なく仕立あげたつけ——」

斯う思ふと小枝子の眼の前には、チヨコチヨコツと裾の方にしよんぼりした模様をちいた、石持の出来て買った奉書の式服がちらついた。そしてそれを着込んで、ほんの型ばかりの儀式を舉げたその夜の光景が、まざ／＼と思ひ出られる。

「幾ら考へたつて仕方がない、私と貴美子さんは先天的に境遇が違つてるんだもの、金持の家に産れて、好き放題な學問をして、嫁入り先きの定りもしない先から、斯うして幾故も／＼紋附まで造へて貰へる人と、

私のやうに貧乏な中で育つて、嫁入夜一つだつて小學校に勤めた月給で買はねばならんやうな不仕合せな者ども、私もせめて貴美子さんの半分でも可い、思ひ切つた氣持になつて暮し度い——

小枝子はこんな事も考へた。思つた事は何でも構はず云つてのけ、やつてのけ、我儘ではあるが見て居ても氣持の好い貴美子のしぐさと、事毎にいちけした態度の自分と——小枝子は焦立たしげに頭を振つた。

ふと障子に鳥影がさして、針前の南天に積つた雪がばさりと落ちた。

小枝子は鉄を執つて、小棧の縫糸を切つた。

(二)

「馬鹿にしてるぢやないの、本當に、猫ぢやあるまいし、失敬だわ」

「如何なすつて？」

矢鱈昂奮し切つて入つて來た貴美子を迎へた小枝子の調子は、相變らず柔らかな、ずんべりぼうとしたもの

のである。

「あなた如何思ふこと？」

「キミコイヤナラサエコキメタシ、てすつてさ、餘りぢやなくつて？」

まじ／＼と眼元を見据ゑられて、小枝子はまぶしさ

に困つた。

「ねえ猫の兒ぢやあるまいし、まるでミケが嫌なら黒てよろしいつて云ふのと同じだわ、小枝さん、あなた侮辱だと思はなくつて？」

「本當にねえ」

「嫌だわそんな、そんな不得要領な返事のしかたをしないで、何とか云つたら可さうなものだわ、だつて左様ぢやありませんか、假りにも妻を貰はふと云ふのに、一生の同伴を決めようと云ふのに、私が嫌ならあなたを貰ひ度いなんて、屹度私達を猫の兒同様に考へてるのに違ひないわ、若しさうでなきや、まるで一家の妻を道具と同じに思つてるのよ、そんな人の處へ誰が行くもんですか、ねえ小枝さん、お互が結婚するなら、少くとも貴美子でなくつちやならない、小枝子で

なくつちや嫌だと云ふ、つまり私達それ自身を貰つて呉れる處へ行かうぢやありませんか、貴美子でも小枝子でも可い程なら、先方では誰でも可い、妻と名のつくものでさへあれば澤山なのでせう、無理に私達を煩らはす必要はないんだわ、馬鹿々々しい斷つておしまいなさいよ」

「断はること？」

「でも伯父さんや伯母さんは如何お思ひなすつてらつしやるんでせう？」

小枝子は殊更返事をさけて斯う訊いた。

「如何思つてるんですか、あなたがそんな風だから、てんでみくびられて了つて、あなたの承諾も經ないで返電したようよ」

「まア何時？ どう云つて？」

「フ、フ、でも流石に心配するから頼母しいわね、大丈夫よ、まだ取りさめはしなくつてよ」

「一體如何しつたて云ふの貴美子さん、私には電報が何處から來たんだか、それも解らないわ」

「ホ、ハ、御免なさい私が周章で、たわ、電文にはね、字敷を儉約してたゞと丈けしかしてないわ、だけでも私には解つてよ、沼津の松田牧師なの」

「あ、あの……」
 「お解りになつて、例の京都の法學士の口ですよ」
 「まあ、ねえ」

どちらつかずの、強て平氣な、何氣無い返事をしては居るが、小枝子の胸は浪打つた。此の縁談法學士の口と云ふのは、最う半年も前から話があつて、伯父も伯母も可成り乘氣になつて居たのだが、肝腎の本人たる貴美子の氣持が定らぬので、ついその儘今日まで引張られて居るのであつた。その口から假りにも自分のやうな不運なものを所望して來ようとは——小枝子は何故とも知らぬ身震ひをさへ感じるのであつた。

「兎に角二三日うちに來るでせう」
 斯う貴美子は微笑んだ、ともう小枝子は周章で切つた。

「誰が？」
 云つて了つて、まづかつたと氣がつくと、又しても

小枝子の顔は染られた。
 「定つてるぢやありませんか、だつて見合ひに來て貰ひ度いつて、父様つてば先刻返電しちまつたのよ」
 「あなたも見合ひをなさる事？」
 「嫌だ、誰がするもんですか、あなたなさるのよ」
 「私が？」

小枝子は全く思ひ掛けぬ事のやうにも思はれた。
 「でも伯父様方は是非あなたにおさせなさり度いお積りなのかも知れないわ」
 「さう、或はさうかも知れませんが、併しね、私斷して嫌だつて、先刻もうさつぱり斷つて、両親共承知した筈なんだから、兎に角あなたの爲めに呼ぶんだわ」
 貴美子は小枝子の辭の、紅潮し切つた顔を興ありげに見守つた。

「如何なさる？」
 「兎に角黙つて見合ひだけなさること？」
 「如何しませう？」
 小枝子の眼は教を求めて輝いた。
 「私には解らない、だつてあなたの氣持も知れないん

だもの——私ならね、嫁氣がなくなつて、どんな男か見てやれ位で見合ひをすました上で、嫌々を通す事も出来るけれど、小枝さん、あなたにはその藝當が出来ないんだもの」
 「さうかと云つて私、折角伯父様がお呼びになつたものぞ、私が氣儘で如何する事も出来ないし……」
 「だから成り行きにまかせるつて云ふの？そして序に嫁いて了ふと可い、あなたは一體そんな方なんだ」
 齒痒つたらしく、貴美子は吐き出すやうに云つてのけた。

暴若無人な從姉の態度には馴れ切つた。
 「あなたは一體そんな方なんだ」
 小枝子は貴美子のこの一言に、自分でも心から同感しないでは居られない、それを氣に掛けて、怒つて、腹立てるよりも、本當の事自分で自分の運命を決する事さへし得ないやうな、弱い性格を、われと咀つて悲しんだ。

「あ、私はどうして斯様な女だらう！」

(三)

「小枝子さん、是非進んで女子高師にお入んなさいよ、大丈夫ですつてば、あなたが合格しない位なら、誰にだつて入學出來る氣遣ひなし、受合つて置きますわ」

小枝子の眼の前には、金縁の眼鏡を光らせた、薄あばたの井澤先生が、くつさりと浮んで見える。
 「よく來て呉れました、私はどんなにあなたを望んで弟の爲め、井澤の家を爲め、あなたの返答を氣遣つて苦勞したか知れませんが、でもねえよく承諾して呉れました、學校時代から、私はすつくりあなたに心酔しちまつてますのよ小枝子さん」

生れて初めて親の家を離れて、いよく他人の家に嫁いた日の第一番に、斯う云つて呉れたのも、やはりその薄あばたの、義姉と呼ぶべき井澤先生その人であつた。
 死ぬ程望んだ高師に入れて貰へる目當も無く、毎日紫紺の袴を穿いて村の小學校に勤めた小枝子は、井澤先生を義姉に持つと云ふ、たゞそれ丈けて、母からすめられるまゝ、井澤家の人となるべく承知した。無

論良人の中學卒業生で、藥種屋の家業を引継いで居る事など、さうした事は母からの話して知つて居た。だが學校の教室、寮舎で崇拜し、愛された井澤先生も、家庭で親しく見て居ると、案外こればと思ふやうな事が多かつた。

「小枝子さん、あなたは如何したの、私はそんな風な教育はしなかつたつもりだが」

義姉は事毎に斯う聲を尖らせた、舅姑はたゞもう女でこそあれ女學校の教師まで勤めるやうな我が子を自慢で、何事にも律が律が娘の云ふなりになつて居る。律子の上に今一人總領の義姉にあそのと云ふのがあつた。そしてその人の養子は國次郎と呼んで、皆なゴタゴタと井澤の家に同居して番頭のやうにも使はれて居たが、律子の命令で國次郎は妻子を残して、一人だけ、とう／＼アメリカへ出稼ぎに行かされた。

さうした家庭の中で良人の放蕩——小枝子は歸らうとも思はなかつたのだけれど、父の法事に實家へ歸つて、のい話の序に口を迂らしたのが母の氣に障り、そのまゝ無理と井澤の家へ歸されぬ事になつてしまつたのである。

たのである。「あの時無理にも歸つて、井澤の人になつて居たら……」

小枝子は折々斯うした事を思はずには居られない。井澤の家で良人と一緒に住つたのは、ほんの半年足らずの僅な間で、おまけに放蕩な人ではあつたが、それは悉くな義姉に對する不満から、半分は自棄も手傳つての事であらうとも思はれる。仲人が談判をつけて、いよ／＼荷物を受取らうと云ふ時云つたとか云ふ言葉が、無性に氣になつた。

「小枝子は如何してます？心から僕が嫌なのでせうか僕は、僕は、一生あの女の事は忘れぬい」

小枝子はよく良人の夢を見た。ハッと眼が覺めると、並んで敷かれた寢床の中に、すやすやと思ふ事も無げな貴美子の寝顔を見て、氣恥かしさに顔を赤らめもした。そして薄暗い丸暗燈の灯影の映つた天井を見詰めたまゝ、夜中涙の流れるまゝに、べと／＼に枕紙を濡らした事もある。母親が氣を揉んで方々知り合ひを聞き歩き、探して

知る再婚の口も、兎角香ばしからぬものばかりで小枝子は親類への手前、奉公人の手前としては、何彼につけて出戻りさんと云ふ言葉に肩身をせまがつた。「急ぐ事はない、何のまだ老ひ朽ちたと云ふ年では無し、斯う云ふ事は氣長く構へて、運の向いて來るのを待つとるに限りませう」

伯父伯母はその津度斯う云つてなぐさめた。泰然として落着き拂つた二人の様子を見て居ると、小枝子は思ひ迫つた胸がすくやうにも思はれる、そして今に何處か幸福な／＼家庭が、自分の嫁くの待つて、呉れさうな氣持がしないでもなかつた。

「やつぱり運が向いて來たのだらうか」小枝子は仕事の手をやめて考へた。

「貴美子さんの仰有るのも道理には相違ない、だけれどもそんな貴澤ばかり云つてた日には、私なんぞ一生みぢめな生活をしなければならんのだもの……三毛だつて、黒だつて望まれ、ばまだしもだわ」

ふと思ひついたやうに小枝子は次ぎの間の貴美子の書棚をあさつたが、やがて婦人雜誌を一部持つて來た

●六十圓の軍人生活

●七十五圓の教師の經濟

小枝子の眼は斯うした文字に輝やいた。閉て切つた障子の外には、春の日光が消え残る雪にさし添うて、炬燵の温氣の立て籠めた室の中に、小枝子はうつとりと夢見るやうに雜誌の頁を繰りながら、遙かに遠い京都の、まだ見ぬ人の上に思ひを走せた。急に廊下を此方へ人の足音がする。小枝子ははじかれたやうに雜誌を閉ぢると一緒に、手早く炬燵蒲團の中に押し隠した。そして何喰はぬ容子を装ひながら、又もや仕事の布を取り上げた。

だが遂に人の來る様子も無い、大方猫か何か其處いらを駆け出したのでもあらうか。「何だつまらない！」

小枝子はやつと静まつた胸を撫て下したが、最う二度と再び隠した雜誌を取り出して讀む氣持はなかつた。「私はまア、どうしてこんな女だらう」

殆んど口癖のやうに呟やいた小枝子の眼には、涙が光つて見えた——(完)——